

# 筑波大学体育センターにおける カリキュラム評価のグランドデザイン ー授業評価を軸としたカリキュラム改善の提案ー

坂本昭裕, 小田 梓, 門野洋介, 武田 剛, 大森 肇, 小俣幸嗣,  
山田幸雄, 本間三和子, 平山素子, 安藤真太郎, 鍋山隆弘

## The framework for curriculum evaluation of physical education at University of Tsukuba : curriculum improvement based on teaching evaluations

Akihiro SAKAMOTO, Azusa ODA, Hirosuke KADONO, Tsuyoshi TAKEDA,  
Hajime OHMORI, Koji KOMATA, Yukio YAMADA, Miwako HOMMA,  
Motoko HIRAYAMA, Sintaro ANDO, Takahiro NABEYAMA

### 1. はじめに

筑波大学体育センターでは、平成 21 年度より「知の競争時代における大学体育モデルの再構築に関する実践的研究 (SPERT プロジェクト)」に取り組んでいる。このプロジェクトには 3 つのグループがあるが、本稿はその中の 1 つである「共通体育における再構築モデルの実践と評価グループ (以下 G3)」の研究経過の一部を報告するものである。

G3 の研究目的は、カリキュラムの作成を担当する G2 で検討された新カリキュラムについて評価することであるが、「カリキュラム評価」の理解については、当初誰もが漠然としたイメージレベルに留まっていた。いったいそれが具体的にどのようなことであるかについては、認識や受とめ方に少なからず違いがあったように窺われた。例えば、質問紙を用いて何らかの心理的な効果を測定することであったり、体力

や技術などの効果を測定することであったり、あるいは体育センターでこれまで実施している授業評価であったりと、教員それぞれに「カリキュラム評価」という言葉を巡って異なるイメージがあった。

このようなこともあって G3 では、まず「カリキュラムの評価とは何なのか」ということについて共通認識をもつことを課題にした。昨年度より専門家を招いてセミナーを開催し、勉強会などで議論を重ねてきた。その結果、ようやく大枠の共通認識が得られつつある。

そこで、本報告では体育センターの共通体育の新しいカリキュラムにおける評価とは何か、どのように評価を実施してゆくのかについてそのグランドデザインを提案するものである。

### 2. カリキュラムとは何か

まず、ここでは、カリキュラムという言葉

明らかにしておく必要がある。カリキュラムに類似した概念として教育課程という言葉があるが、それとの比較から違いを明確にしておきたい。一般的には、この両者は同義と考えられやすいが、そもそも、教育課程という言葉は、英語の 'curriculum' (カリキュラム) の訳語である。学習指導要領では、「教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を見童の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である (文部科学省, 2008)。」としている。具体的には、年間の『指導計画』を意味している。

一方、カリキュラムという言葉は、ラテン語の currere (クレーレ: 走る) から派生した言葉で、「走ること」から「走路」や「学習する道筋」を、そしてさらに「学習すること」「学習経験そのもの」を示すものであり、『学習経験の総体』(田中, 2009)を意味する概念である。

1974年に東京で開催されたカリキュラム開発に関する国際セミナー以降、教育現場では、カリキュラムを「教育目標、教育内容、教材、教授、学習活動及び評価の仕方まで含んだ概念として把握し、いわゆる顕在的カリキュラム (overt curriculum) と潜在的カリキュラム (hidden curriculum) の両者を含めた、学習者に与えられる学習経験の総体である。」(文部省, 1975)と述べている。このようにカリキュラムは学生の学習経験のすべてを包括するものと考えられ、年間の指導計画を指す教育課程とはおのずとその違いが明確であることが理解されよう。

したがって、カリキュラムと教育課程の関係を考えるならば、図1に示す通り、カリキュラムは、教育課程を含むものとして捉えられる。そして学生が学習で経験する総体であるカリキュラムには、顕在的なもの(目に見えるもの)と潜在的なもの(目に見えないもの)があり、教育課程は、顕在的なカリキュラムに相当するものとして考えることができる。また、潜在的なカリキュラムとは、教員が意図していないの

に学生が自然に学んでゆく内容をさしている。それは、筑波大学体育センターの伝統のようなもの、クラスの雰囲気、体育施設などの学習環境、あるいは、学生同士や教員との人間関係など様々な学習の内容が考えられる。

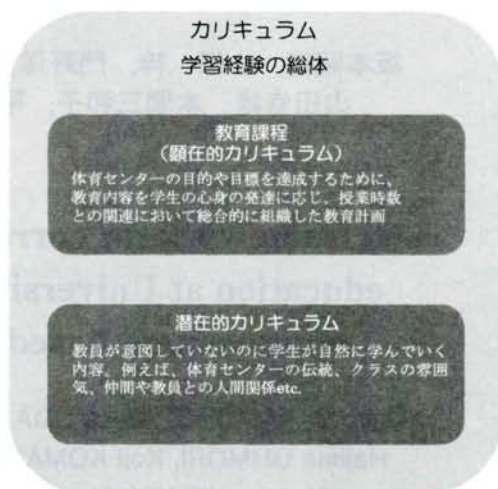


図1 カリキュラムと教育課程の関係

### 3. カリキュラム評価の考え方

#### (1) カリキュラム評価の目的

カリキュラムを評価することの目的は、カリキュラムを改善するため、あるいはカリキュラムについて意思決定するためであるということについては疑う余地のないところであろう。簡単に言えば、授業をよりよくするために評価を活用するということである。つまり授業と評価の関係は、評価の結果によって授業や指導を改善し、さらに改善された授業を再度評価するというように円環的な関係にある。すなわち「指導と評価の一体化」を実現させてゆくことに他ならない。

このような、指導と評価の一体化を実現するためのシステムとして、P (plan) → D (do) → C (check) → A (action) というマネジメントサイクルがよく知られている。

田中 (2009) は、カリキュラムを評価すると、単に授業の効果測定することや成績を評価

することではないと述べたうえで、「カリキュラムを評価するとは、調査データをもとに目標の達成状況を把握し、カリキュラムそれ自体を評価する活動であるが、その際、学習者の行動変化より以上に、実践者が取り組むべき改善点を明確にしたい。」と説明している。つまり、調査データからカリキュラムの不備を確認し改善し、さらに、その改善点が機能しているかを再び調査するのである。すなわち、測定する対象を教育効果から「改善」効果に転換する（田中、2009）ことを説明している（注1）。これはカリキュラム評価がマネジメントサイクルの中で円環的になされることを強調しているものと思われる。

## (2) カリキュラム評価の対象

安彦（1985）は、カリキュラムの中で評価対象となるものについて、以下のものを指摘している。まず、カリキュラムの内部要素として、①教育内容、②教育内容の組織原理、③履修原理、④教材、⑤配当日時数、⑥指導形態、⑦指導法・指導技術を指摘している。また、外部要素として、①施設・設備との関連、②教員集団の質と量との関連、③行政的決定過程との関連の観点からカリキュラムの効果を検証することを提案している。これらは、いわゆる「顕在的カリキュラム」に関連した内容といえる。

もう1つは、「潜在的カリキュラム」に関するものであろう。これらについては、先述のとおりであり、教員が意図しないで学ばれる内容を指している。体育センターの体育に対するイメージであったり、価値観であったり、態度、情操面など様々な人格形成に関連した側面を評価の対象にすることができるとと思われる。

最も優先的に評価の対象としなければならないのは、教員側の実際の教育活動を枠づける内容に関するものであろう。例えば、教材、成績、あるいは授業評価などがあげられよう。これらは、教育課程に添った資料と考えられるが、加藤（2000）はこのようなデータ資料を「フォー

マル・データ」と呼んでいる。一方で、教育課程以外の潜在的カリキュラムに関するデータは、「インフォーマル・データ」と呼び、このようなデータも評価の対象にするべきであると述べている。確かに、潜在的カリキュラムも授業を成立させる重要な要素であることには違いないが、収集されたデータを如何に評価に活用するのかということになると、やや難しい側面もあるように思われる。

また、教育で実施されるカリキュラム評価は、「あらかじめ決められた目標がどれだけ達成されたか」という目標標準型（目標分析モデル）の評価が中心になりがちである。しかし、カリキュラムは、潜在的なカリキュラムも含む無意図的に学ばれる経験の総体であるから、当初の目標にとらわれることなく、通年の授業の中で様々な資料を収集し評価することも大切である。このような評価については、目標自由型（ゴール・フリーモデル）（根津、2006）と言われている。この場合、授業には目標がないわけではなく、目標にとらわれずに授業を展開するのである。例えば、大きなテーマ設定の中で学生自身が、学びの意味を考えると意味生成的な学びは、これにあたると思われる。

筑波大学の共通体育では、多種多様なスポーツ・運動の科目を開講し、さらに、様々な研究を専門にしている教員が指導にあたっている。授業では体育センターの掲げる目標を超える学びがあることは容易に想像がつく。したがって、体育センターにおいては、目標自由型（ゴールフリー）のカリキュラム評価の視点も欠くことができないのではなかろうか。

## (3) いわゆる評価とはどういうことか

評価（evaluation）という言葉は、日常生活においても比較的良く使用される言葉であろう。例えば「私は彼のことを評価している。」などと使用する場合は、これは多くの場合、彼を肯定的に捉えていることを意味している。しかしながら、カリキュラム評価の文脈で使用さ

れる「評価」の意味は、このような肯定的側面だけを意味することとはかなり異なっている。少なくとも、研究的な観点から用いる際には、「善悪・美醜・優劣などの価値を判じ定めること」（広辞苑）とあるように、価値判断することにある。したがって、われわれ自身にとって、耳の痛いことも当然ながら明らかになる可能性がある。そしてそれを明らかにする際には、調査などによる根拠をとまなう価値判断でなければならない。「よいのか、わるいのか。わるい場合は、どこを改善すればよいのか。」というようなことについて根拠をもって示すことが必要になる。

カリキュラム評価の方法は、調査法を活用することが多い。また、それは量と質の両面から調査しないと全体像が明確にならない（田中，2009）。体育センターにおいて毎年実施している学生による授業評価などは、質問紙法（量的）によるアンケートが適しているであろうし、教員相互による授業評価などは、観察法（質的）などが適しているであろう。また、カリキュラムに関して、より深い意見を資料にしたい場合などは、個人やグループなどによる面接法なども活用することがあろう。ここでは、詳しく評価方法に関して論ずることはできないが、いずれの方法を用いるにしても明らかにしたい事象によって使い分けられなければならない。そして、調査によって得られたデータが資料として大切であることは間違いないが、それ以上に、収集されたデータを基に過大でもなく、また過小でもなく価値判断をする営みが最も重要になることは言うまでもないことである。

#### 4. 体育センターのカリキュラム評価のグランドデザイン

ここまではカリキュラム評価についてその考え方について論じてきたが、ここでは体育センターの新カリキュラムの評価の方法について具体的に提案してゆきたい。

まず、体育センターの新カリキュラムの評価のグランドデザインを図2に示した。評価は、大きく2つに分けられる。1つは、教育課程に関連する顕在的カリキュラムの評価であり、もう1つは潜在的なカリキュラムの評価である。以下それぞれ説明する。

##### 1) 顕在的カリキュラム評価

###### (1) 授業評価

図2に示される通り、授業の評価は、a学生（学習者）、b同僚教員（教員相互）、c教員（授業者）の3つが考えられる。評価する観点が評価者それぞれで異なるため、評価内容と評価方法を十分に検討する必要があると思われる。

###### a. 学生による授業評価

わが国では、学生による授業評価をカリキュラム評価の中心に据えることが一般的である。これまで体育センターでは、学生による授業評価を長年継続してきているので、やはりこの評価を軸にすることが効率的、効果的のように思われる。

学生による授業評価は、教員による教育活動の評価（総括的評価）の資料になるとともに、授業実践の状況と課題を把握して改善につなげる手段（形成的評価）という二重の性格をもっている（関内，2010）。さらに学習に対する学生の自覚および意欲を引き出すというねらいも含まれている。

一方で学生が判断することに対して「学生の判断が正しいかどうか」との議論もある。しかし学生の授業者に対する主観的な判断こそが、学習意欲や動機付けなどの学びの態度を決定する重要な要因と考えられるため、この観点からいっても学生の評価は貴重な資料となることを理解しておくべきであろう。

G3では、新カリキュラムに対応した学生による授業評価アンケート用紙を作成している。これまでの授業評価に用いられてきた項目に加え、新カリキュラムにおける体育センターの5つの教育目標に関する項目を設けた。授業にお



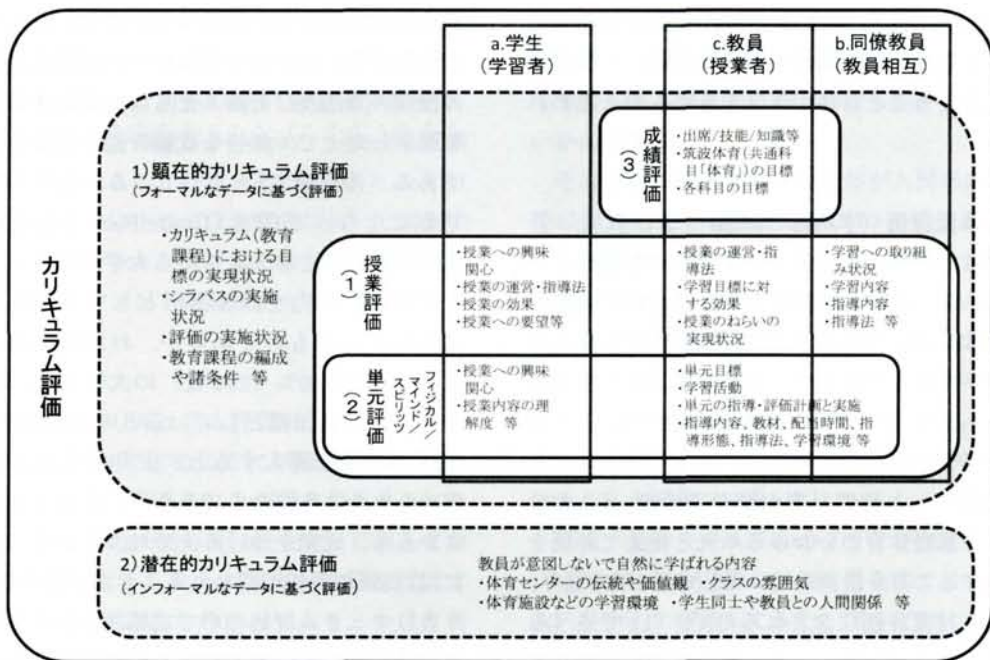


図2 カリキュラム評価のグラウンドデザイン

いてどの程度教育目標が達成されたかについて評価することを眼目においている。実施時期は、これまでと同様に年度の終わりに実施することを検討している。

#### b. 同僚教員による授業評価

これは、これまで行ってきた教員相互による授業研修の延長線上にあると考えてよい。同じ共通体育の授業を担当している同僚教員からの意見やアドバイスは、授業や指導の改善には、大いに役立つと考えられる。評価の内容は、学生による授業評価と異なり、学生の授業への取り組み状況、学習内容、指導内容、指導方法についてより専門的で深い見識から行われるであろう。したがって、評価の方法は、質的な方法が適していると思われる。

例えば、授業者は、参観する同僚教員に評価を受けるにあたって、あらかじめ授業のねらいや、観てほしい内容について伝えておくのである。そして、評価者である教員は、それを中心に授業を観察する。さらに、一般的な評価項目についても、用紙1枚程度の評価シートにレ

ポートし、授業者である教員にフィードバックするという具合である。評価する側にも授業研修となるため、一石二鳥ではないだろうか。

授業を参観する評価者は、3人～4人で、まずは各教員が年に1回実施してみてもどうだろうか。

#### c. 教員自身による評価(自己評価)

教員自身による自己評価も重要である。前述の学生による授業評価、同僚教員の評価、あるいは成績、レポートなどの資料を参考に自分自身の授業を振り返ってみることは必要であろう。

G3では、これらに加えて、学生による授業評価の教員版の作成を検討している。調査の項目は、学生とほぼ同じである。この評価のねらいは、1つは、教員自身の評価と、学生の評価のずれを確認することである。学生と教員の認識の違いを把握することは、授業の改善点がより明確になるであろう。2つめは、自分の授業運営や指導法、あるいは体育センターの教育目標の質問項目に対してどの程度達成されたか

を、数値で評定しながら客観的に振り返る点にあると思われる。調査用紙に向き合い、質問項目に答えること自体が意味をもつものと思われる。

## (2) 単元評価（学期毎の評価）

体育センターの新カリキュラムの特徴の1つは、1年生の授業（基礎体育）を大幅に見直した点にある。1年次の学習内容を3つのカテゴリー（フィジカルリテラシー、スポーツスピリット、スポーツマインド）に分けて、1学期毎に学習する。それぞれに、科目（スポーツ・運動種目）と学習目標が異なるので、G3ではこれを基礎体育のいわゆる単元と捉えて評価を実施することを計画している。図2に示す通り、これも授業評価に含まれるので、(1)で述べるべきなのだが、新カリキュラムにおけるセールスポイントでもあるため1つ項を起こした。

単元評価は、カテゴリー毎の学習目標との関連から質問紙で数量的に評価し、それぞれの科目において目標が達成されているかどうかを調べるのが第1のねらいである。また、目標を達成するための配当時間、指導内容等について各教員についても調査することが必要である。学生へは質問紙による評価が考えられる。また、教員には記述による評価が適当であろうと思われる。

平成25年度からは、筑波大学の制度が変わるため、当然ながら共通体育のカリキュラムも大きく変わる。したがって、今後基礎体育のあり方を考えるためにも、単元の評価を実施しておくことは有益ではないだろうか。1学期でどの程度の成果をあげることができるのかを、教員自身の肌と客観的な評価で確認しておくことは、カリキュラムを検討する上での貴重な判断材料になると思われるからである。

## (3) 成績評価

平成10年10月の大学審議会答申では、「大学の社会的責任として、学生の卒業時の質の確

保を図るためには、教員は学生に対してあらかじめ各授業における学習目標や目標達成のための授業の方法及び計画とともに、成績評価基準を明示した上で、厳格な成績評価を実施すべきである（傍点筆者）」としている。近年、アメリカにならってGPA（Grade Point Average）の成績評価方式を導入している大学がある。アメリカでは、学力を測る指標として一般的に活用されているものであるが、わが国では、平成18年度で40%（294校）の大学がこの制度を導入し評価指標としているとのことである。GPAの制度を導入すると、より厳密な評価が求められるようになるであろう。このようなことから、成績をつける上では、これまで以上に、教員側の責任が問われることが予想される。

カリキュラム評価の中で成績評価を考える場合、検討しておく課題がいくつかある。それは教員が評定する際の枠組みに関することである。まず1つは、教員が成績をつける際の評価（評定）の観点と規準（注2）であろうと思われる。

例えば、現在小中高等学校の体育では、新学力観の考え方による、4つの観点を採用している。教育目標に対して、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」の観点から評定を行っている。さらに、このような観点を踏まえて、運動の内容（種目）の特性を勘案して、具体的な評価規準（各運動種目における規準）を設定している。体育センターでは、なにも同様な評価方法にとらわれることはないと思われるが、少なくとも観点については検討するべきであろう。

2つ目の課題は成績評定の分布の把握に関することである。体育センターは、非常勤講師や学群協力教員も含めると40名近い教員が体育を担当し成績をつけている。したがって、ある程度の申合わせがないと、評定のばらつきが生じる可能性がある。これは学生にとっては、重要な問題である。かつて、体育センターでは教員の評定の調査が実施されたことがあったがと

ても有意義であった。教員自身が、他の教員と比較してどのような評定分布であるかが把握できるからである。前述の通り、体育センターは、共通体育担当者の数が多いため、いわゆる成績会議を実施することは現実的でない。したがって、年度末に学生につけた評定について調査することはカリキュラム評価のみならず体育センターのマネジメントの観点からも大切であると思われる。

## 2) 潜在的カリキュラム評価

これは、G3でどのように評価するかについては未だ検討中である。ただ潜在的カリキュラムが、学習者の人間形成（社会化）に対して顕在的カリキュラム以上に強力な作用を及ぼす（田中，1999）こともわかっており、やはり新しいカリキュラムを評価する上で、注目すべきことであることには違いない。しかしながら、潜在的なカリキュラムを研究するためには、そ

れなりの困難が伴うのも予測がつく。それは、例えばある教員の授業では顕在的なカリキュラムでも、ある教員では潜在的なものかもしれないからである。

そもそも体育の教育目標自体が人間形成と密接に関連している面があり、時に効果がカリキュラムの表の影響なのか、裏の影響なのかが判然としない点が多々存在している。また、体育センターが開設している多種多様な科目における学生の学習体験が、きわめて個別的で多義的であるからでもある。今後、G3では、このような困難性を理解しながら評価について検討することが課題である。

以上、新カリキュラムのグランドデザインについて主に教育課程の評価（顕在的カリキュラム）を中心に提案してみた。図3には、各評価の1年間の流れを示した。

教員においては、学期中の授業中で行う評価（同僚教員による評価）、学期末ごとに行う

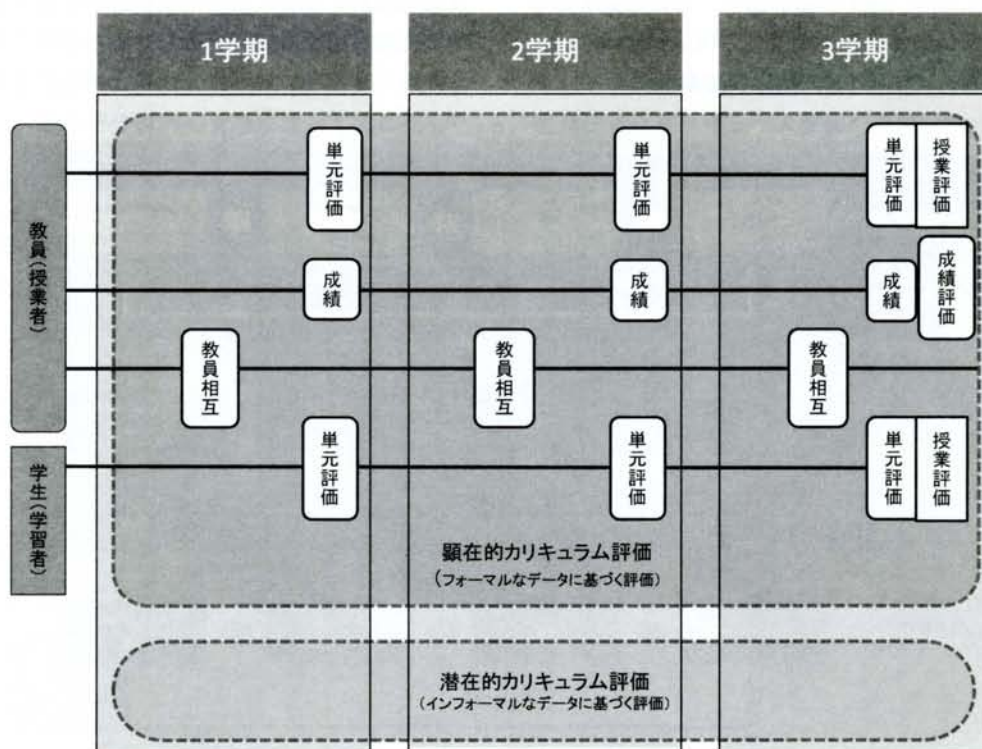


図3 評価の流れの概要



単元評価（1年生のみ）、そして年度末に授業評価（自己評価）と成績評価がある。学生においては、単元評価（1年生のみ）と年度末の授業評価がある。なお、体育センターでは、体力測定を年に1度実施しているが、これもカリキュラム評価の資料になるものと思われる。なお、潜在的なカリキュラムの評価については、基本的な調査のあり方を含めて今後の課題である。

## 5. 評価をカリキュラム改善に活かすために

最後に、この評価を十分に機能させるためのシステムのイメージを説明しておきたい。カリキュラム評価は、PDCAのマネジメントサイクルの中で評価（Check）が実施され改善（Action/Improvement）されてこそ機能するものである。

体育センターのカリキュラム評価ではやはり授業評価が軸となりうる。そして、その「起点」となるのは、図4に示す通り、各教員の1回毎の授業にある。ここでまずPDCAが行われる。

さらに、年度末の授業評価と成績評価から共通科目のカリキュラムの改善に活かすという流れである。システムそのものは、きわめてシンプルでわかりやすいものであろう。しかしながら、実際にシステムを運用するとなると、手間暇の掛かることであることも間違いがない。つまり各教員の協力なしにはなしえないの言うまでもないことである。

## 6. おわりに

筑波体育の教育目標を達成する新しいカリキュラムを作ることは、授業の内容を考えるだけでは不十分である。同時に、授業や成績あるいは施設など学生の学習体験に関わるすべてを評価するシステムを作ることも必要である。それは授業実践と評価は一体のものだからである。

それゆえ評価のシステムを考えることは避けて通れない。しかし、一方で体育を評価するための万能な方法など存在しないのも事実であろう。したがって、カリキュラムを評価するため

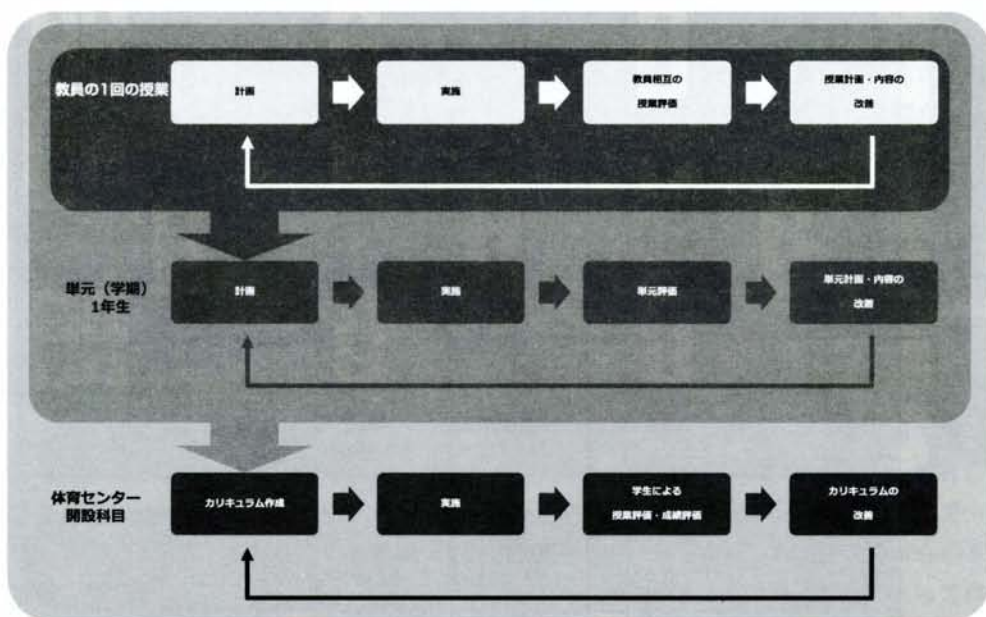


図4 体育センターのカリキュラム評価のマネジメントサイクル



のデザインそのものを、再び検討してゆくことも忘れてはならない課題であろうと思われる。

## 付記

本報告は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号 21240060）の一部である。

## 注

（注1）田中（2009）は、カリキュラム評価においては、P（plan）→D（do）→C（check）→A（action）からC（check）→A（action）→P（plan）→D（do）に転換するべきであろうと述べている。それは、カリキュラム評価の基本は、授業をまず、観察することから行われべきであるからと説明している。

（注2）教育評価では、規準（のりじゅん）と基準（もとじゅん）は意味が区別されている。教育評価辞典（2006）では、教育目標を評価目的の文脈に従って具体化した目標や行動を用いるが、これを「評価規準（criterion）」という。それに対して、後者の量的・尺度的な判定解釈の根拠を「評価基準（standard）」という。

## 引用文献

- 安彦忠彦：カリキュラムの評価的研究。新版カリキュラム研究入門，勁草書房，181-207，1999。
- 古川善久：授業評価を起点としたカリキュラム評価。カリキュラム評価入門，勁草書房，91-112，2009。
- 関内隆：はじめに。学生による授業評価の現在，東北大学出版会，1-2，2010。
- 加藤幸次・三浦信宏：生きる力を育てる評価活動，教育開発研究所，2000。
- 文部省：カリキュラム開発の課題。カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書，大臣官房調査統計課，1975。
- 文部科学省：21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学（答申），1998。
- 文部科学省：小学校学習指導要領解説総則編，2008。
- 根津朋実：カリキュラム評価の方法。ゴール・フリー評価論の応用，多賀出版，2006。
- 根津朋実：カリキュラム評価の理論と方法。カリキュラム評価入門，勁草書房，29-49，2009。
- 田中統治：カリキュラムの社会学的研究。新版カリキュラム研究入門，65-86，1999。
- 田中統治：カリキュラム評価の必要性和意義。カリキュラム評価入門，勁草書房，1-27，2009。
- 辰野千尋・石田恒好・北尾倫彦監：教育評価辞典，図書文化社，2006。